

學齡前兒童の發達と教養 (完)

文學士 入澤 宗壽

五、個性化の時期 (つゞき)

自己支配。この時期中、前時代の經驗の自己同化上、及び個性化上、多くを健全に放任してやらすといふとは大部分の兒童について恐らく最も必要のとであらう。他の人から何等かの支配を受けると、同年齡の兒童と何かを共同してやることは望まじきことではあるが同時に一日の幾部分は他人の一定の支配から放れることが必要である。

兒童は種々の遊戯に對して機會と堪能とを有す可きではあるが、同時に特殊のやり方も強ひられ又は自分の幸福と他人の快樂に對して必要ある限りは他の方法をやる事を出來なくさす事も必要である。勿論大人の標準を以て兒童を強ふるは宜しくない。惡行を繰返すに不都合な状態に兒童を置

き、善良の習慣を續けるに都合よき條件を與へなければならぬ。併し兒童は或事に對しては他人から直接に支配を受けることが必要である。支配、命令の大部は單に暗示たる可きであるが、然も易々諾々たる服従が必要である。

此の幼稚園時代に於てフレーベルは自己活動を甚だうまく力説した。然しながら多くの幼稚園に於ては兒童の自己活動は意識的か又は無意識的に教師に刺戟され支配される。これは或幼稚園に始めて這入つた女の兒が「私は先生がお仰つた事をしやうとは思つたが、する事は厭だつた」といつた言葉によく表はれて居る。勿論多くの場合に於て、兒童は單に教師の影響で物事をせねばならぬとは

意識しないけれども、さういふ場合も屢々起るのである。

幼稚園は又家庭に於けると同じく團體中の共通意識の發生及び保存をうまく力説して居るが時には自我の個性化が發達の著大なる部分を占める時に共通方面を力説し過ぎる場合が屢々である。

この時代は大人に存するやうな社會的感情を發達させるには早過ぎるから、せいふゝ家族間の共同意識を幼稚園の範圍に擴げる丈けのことではなければならぬ。その間に個性的意識は天性の傾向と收得の經驗とに應じ、又は他人の實例よりの時々々の暗示により或は幾分積極的要求に應じて形成せらるべきである。社會的發達のより高き形式は意識的個性の發達した後乃至競争、反對、共同を含む同年輩のものとの交際が長くつゞいた後に始めて來るものである。幼稚園に従事する人々が思ふ如くに兒童が團體に對するうぶな共通意識や信賴の念はこの時代では共同的感情又は行爲の醇正にして

永久なる形のものにはならないのである。幼稚園の中では感得せられる美しい幼稚園の精神も、外には存在しない、たゞ一時的のエデンの園にすぎない。それが永續の形を取るのに他の個性と競争をやつた後の時代のことである。

故に家庭の同情的共同意識を押し擴げて幼稚園に及ぼすは結構のことであるが、この時代に社會的發達の行路に急進しやうとするのは無用のことである。併し家庭で共同意識を欠いだ子供に幼稚園で社會的共同的精神を與へることは後に社會的宗教的理想を形成するに至つて役立つもので有効必要である。

此の時期に於ては兒童は健康なる限りは甚だ活動的のもので、自分自身又は他の兒童と共に事をやつて不知々々の間に練習となるので、その方が大人から支配されてするよりも有効のものである。大人の支配を受けて活動することか一見非常な利益のやうであつても、その支配がすんだ後も

兒童自身でその通りやる様な事でない以上、そんな支配は後の時代に廻すべき事柄である。この時代に於ける兒童の仕事は大人の活動に助けになる事を學んだり、爲たりするのでは無くして、兒童の興味に従つて色々な經驗をしてその個性を發達させるに過ぎないのである。

眞理の區別及び發表。 知性の方面に於ては、この意識的個性形成の時代は觀念及び眞理の標準を形造る時代である。事物の關係と理由とが兒童の注目を惹いて茲に色々な疑問を發するに至るのであるが、それも在來の如き「それは何か」といふ問でなくして、「何の役に立つか」「なぜそんな事をするか」「どうしてするか」等の問を發して物質界及び人間の行動の法則を學ぶに至る。かゝる疑問の答案は他人から聞く方が早く得られるけれども、それは表面的であつて、經驗なり模倣なりから得る方が確實で有効である。兒童に答へないで置くのはその精神的發達を後らするものであるが、ま

た兒童自身で有効に見出されるやうなことも、絶えず答へてやることは觀察を制限してよくない結果を惹起するものである。

此の時期は他人の影響が兒童の想像の上に最もよく働く時代で、兒童は他人のした事を獨り居るときにやつて見るものである。かく彼が他人のなす事を見て興味を感じた事をやつて見て自分の個性を擴げて行き、精神上的の經驗を増して行くのである。

茲に兒童が想像したことと、實際經驗したこととを明瞭に區別することは、知性の發達上重要なことで、かゝる力を得る仕方は中々驚くに足るものがある。それは實際ない事をして遊ぶといふ過程にあらはれるもので、こゝに兒童は實際のことと、想像上のこととの對照を感じて來るのである。

記憶。 眞の記憶が可能となるのは、兒童が自由の觀念を獲得し又自分について確かりと意識的になつた後のことであつて、この種の記憶は四歳及

び五歳頃の兒童に著しい。彼等は前の時期に起る如き、出來事の記憶のみで無く、出來事に對する關係を考へて、其の出來事を現在の經驗と比較するばかりでなく、今の自己と前の自己を對照比較して關係をきめて來る。

この時期に於ては類似聯合が兒童の記憶に重大な位地を占めて來る。前の時代には記憶は言語や對象から喚び起されて來るが、今は他人か經驗を聞く時それに類似した經驗を喚び起すことに興味を感じるやうになる。

併し此の時期に於ては兒童は殆んど有意的記憶の力を有しない。彼の記憶は前の時代に行動が四圍から影響を受けるやうに全く外部の支配に従ふものである。彼は可成豊富な材料を記憶して居るけれども、自分で好むがまゝに經驗のある部を喚起することは出來ないことが屢々である。

此の期に於ける兒童は嘗て見た事件を言葉で發表するものであるが、その話を秩序と時間とによ

つて整理することは出來ないものである。歌やお祈しを記憶することも出來るが、そのお祈の言葉を覺えないでは話しが出來ないのが普通である。

想像及び標準となる心像。想像的活動は既に前の時期に始まり、又次の時期にも著しいが、この時期にも甚だ著しく現はれるものである。自分でお話を拵へたり歌を開放題に作つたりするのは此の時期にあらはれて來る。

又此の時期に對象物から標準的の特長を捉へてそれで他の物にあてはめる作用も起つて來る。甘いと酸っぱいとか、堅いとかといふ區別もかくして確定して來る。慣習的な標準、たとへば月とか、時間とか、金錢とかについても漸次覺えてくる。

兒童の多く特に前に芝居の遊びをしたり又それに興味を感じ或はお伽噺を面白がつた兒童はその影響がこの時期のみならず、次の時期にも残つて働く。かゝるお祈が新しい精神上的の經驗に機會を

與へ、又愉快なるものに對して精神を自由に活動させる機會を作るものである。

概念及び推理。兒童が知覺を反覆したり又は他人の經驗によつて得た心像から形成する標準觀念は、漸次に直接の感覺や全くの想像から離れて概念の形にすむものである。概念を形成する二つの主な要素は同じ種類の經驗を反覆することと興味を感じて經驗の或部に注意を集中すること、の二つである。反覆は習慣の形成に大なる働きをなす如く概念の構成にも大なる働をするものであるが、概念に於ては徑路が一層意識的で經驗の部分に注意が集中される。斯の如くにして意識的觀念が形成され、周圍から獨立するに至るのである。可なり久しくの間は兒童の心像と概念とは殆んど區別のないものであるが、標準心像が形成せられるに及んで、この標準を考へることが起つて來る。兒童の多くは久しい間、想像的活動に止まつて居るが、或者は單に想像活動に満足しないで、

相互關係を吟味しやうとする。この種の兒童は常に質問を發し、その質問も遊戲上の性質のもので無く、世界の神秘を解決する大事業に關するやうな種類のものである。彼等の心は遊び半分の想像で満たされないので、たえず理窟と、關係と、原因とを充されて居る。かくしてその自己の經驗と他人から聞く答とによつて概括をなすのである。

此の時期の推理は常に活動的で鋭敏であるのみで無く、純粹の形式に於てあらはれる。尤も、概念の數が少ないのと確かでないために推理を誤り又兒童の想像する一般原理が不確實なために過を生ずるけれども、それから引き出して行く議論の行程には誤りが無い事が多い。この時のそれらが彼の思考の世界に基礎となるものである。

次の時代に於ては、此の時期ほど宗教、哲學の根本問題に興味を有することは稀である。かくして事物の一般的圖式の或觀念を得てからは、むしろ特殊の問題に興味を有するに至り、青春期の變

化期に至るまでは宇宙の問題には眼を向けられないのである。

三歳から六歳に到る期間は、殆ど前の時期が感情生活形成の時代であつた如く、知性の形成時代である。前の時期に経験によつて生じた感情上の態度が永續的である如く、此の期に形成された一般觀念と同様に永續的である。併し、この期に於ける兒童の一般觀念は一定、正確である必要もなく望ましくもないが、正しい方向に向つて出立するといふことは必要で亦望まじきことである。知覺的であるか、反省的であるか、集中的であるか分析的であるか、散漫であるか多方面であるかといふ如き精神の一般型式は可なり、この期に於て形成されるものである。他人の精神が、發達する兒童の精神を變化し、型造するけれども、この時期に於けるそれらの影響は恐らく、生得的傾向及び感情的經驗ほど大ではない。

此の時期に形成せられる最も重要な概念の一

は、數の概念である。始めには一、二、三等の言葉が意味なしに用ひられるが、後にはそれが色々な物に應用せられ、六つよりは十が多く、廿よりは十が少ないといふ様な事を知り、事物を離れても數について考へるやうになる。これは四歳から六歳までに通常あらはれるものである。

如上、幼稚園時期の兒童について、カークバトリック氏の説く所を見た。自由主義、心理主義に捉はれて居るやうな所もあるが、大體に於て研究上の結果として尊敬せねばならぬ。カ氏の本には一々例證を舉げて居るが煩をさけてそれは凡て略した。所謂兒童の質問を以て宇宙の問題、宗教、哲學の問題とした如きは、形式に捉はれて實質を忘れて居るかの感がある。たゞし或形の推理が彼等に行はるゝは實際で、或論者は推理の如きはずつと後でなければ發達しないといふけれども、その根本のものはこの時期の兒童に見る所である。「未だ發達しない」してふ消極的考察に捉はれないで

實際について見て來なければならぬ。特に思考の一般形式がこの期に定まるとすればこの時期の取扱は甚だ重要である。その他種々附言したい事が

あるが、あまり長くなるから茲に擱筆して、多くを賢明なる讀者諸君の判斷にのこして置く。

『トム・ソーヤ』(二)

|| 英文學に現はれたる子供(十七) ||

岡田みつ

(正月號に掲載したので、續きと御承知願ひます)

トムは、ボリー伯母さんの所へやつて來た。伯母は寢間。茶の間、書齋兼用の奥まつた陽氣な一室の、開け放した窓近く、坐つて居た。そよ吹く夏の風、四邊の静けさ、花の香、蜂の薄眠い囁きが、影響を及ぼして、伯母は、編物をしながらコツクリ／＼居眠つて居た。猫の他に相手が無いのに、猫までが伯母の膝の上で交睫まばたんで居た。伯母の眼鏡は大事をとつて、白髪頭の上に押し上げてあつた。伯母はトムが疾くに仕事を捨て、出奔し

た事と思ひきつて居たのに、かうやつて、不敵に

も態々自分の方から、叱られにやつて來たのを不思議に思つた。トムは、

「もう遊びにいつても宜いだらう。伯母さん」

と言つた。

「何え。もう？どれ程爲たのだへ？」

「すつかり出來てしまつたの。」

「偽言うそを御吐つきでない||偽言うそだけは止して御く

れ」